

パリ大学法経学部図書館を利用して

藤田久一

パリは学生街カルチュラタン、壮大なパントン前の前にある法経学部の裏に隠れた小さな古ぼけた外観の建物、これがパリ大学法経学部の図書館である。いつも半分だけ開かれている重苦しい玄関の扉をまたいで中に入り、地下に通じる階段を降りると、そこが閲覧室 (Salle de lecture) になっている。まず入口の係員に学生証を見せる。建物の外観に比べて不似合なほど内部は明るく、パリでは珍しい蛍光灯が部屋全体を照らしている。椅子の数は四百以上もあるだろうがいつもほとんど空席はなく、とくに5月や10月の試験期には講義録 (Polycopiés) を抱えた学生で満員である。このように図書館利用者が多いのはフランスの学生がよく勉強するからで喜ぶべき現象かという点必ずしもそのようには思われない。

第一に、学生の数が多すぎる点 (法経学部の学生数は二万人をこえている。そのため、二回生の講義が行なわれる新法経学部がリュクサンブール公園の西側に建てられ、そこにも図書館はあるが蔵書はほとんどない)、また彼等は一般に講義録など必要不可欠のものを除いて本をあまり買わず、参考書などは図書館のものを利用すること等がその理由であろう。

さて、閲覧室の端には索引カードの棚がずらりと並んでいる。1952年を境として、それ以後の文献については、著者名カードと書名カードは別々に分けられている。その他に、古くから法経学部に提出された論文カードの棚もある。ただ古いカードはタ

イプではなく手で書かれているので、我々外国人には読みづらい。本を借りるには貸出票に必要事項と座席番号を記入し署名して貸出係に提出する。学生の利用頻度の高い本は手元にあるのですぐに渡されるが、それ以外の書物は平均三十分は待たなければならない。貸出係の上に全座席番号を印した電光板があり、そこに自分の席の番号がともると本を取りに行ける仕組みになっている。このように貸出のシステムは合理的にできてはいるが、貸出までの時間的ロスがかなり大きい。時々いつまで待っても座席番号がともらないので、しびれを切らして貸出係に調べに行くと、求める本はすでに貸出中であることがよくある。図書館の蔵書は一般の学生には館外へは貸出されない。ただ、閲覧室の廻りの書架には、判例集や辞書類が並べてあり、勝手に取出して利用することができるのは便利である。また、その年に発行された雑誌類は一階上の部屋で読むことができる。

借りた本を前にしてきて読みはじめると、向いの席の雑談が聞える。フランス人がおしゃべりなせいも、若い女子学生が多いためか、とにかく落ち着いて読書できる雰囲気からはほど遠い。最後に、我々にとって嫌なことは閲覧室を出るとき、出口でいちいち鞆を開き図書館の本が入っていないことを係員に示さねばならぬことである。しかし、これも慣れてしまうと何とも思わなくなった。

(法学部大学院生)